

今なぜ「CLP」か

「友」地区委員 前岡 志郎

ロータリーは発生以来、何か困ったことが起った時、もっと大きく発展したい時に新しい規則が生れて解決してきました。例えば発足当初出席率と1業種1人を強調した為に、多忙な経済人が中心のロータリアンにとって、ホームクラブに出席困難な会員が多発しました。長期間欠席が続くと退会になります。それを解決する手段としてメイクアップ(補填)の制度が、退会防止策の意味合いも含めて制定されました。

次に1業種1人を強調し固定化すると、その会員が退会するか死亡する迄その職業分類は新会員が入会出来ません。これでは組織の老化になり、新陳代謝による発展が望めません。そこで活性化のための解決策としてパストサービス、シニアアクティブ、アディショナル等の枠が出来ました。実質的にはその時既に1業種1人の制度は終っていたのです。日本戦前の月信にこんな記録があります。「外国では職業によって会員が決まるが、日本の場合は候補者が人脈によって先に人が出てくるので、ひとつの会社から10人もの会員がいて夫々別の職業分類になっている等見るからにこじつけが顕著です。廃止しては如何」又、質量問題からは「パストサービスを制限しよう」等左右に揺れ乍ら発展してきました。

ロータリアンは祖国を守るために銃をとって戦え。そして平和になったら再びロータリーに戻ってきなさいと云う時代もありましたが、100以上の国がロータリー国になれば、ロータリーのある国同士が戦い、ロータリアン同士が争うことになり矛盾が生じてその項目は消えました。1933年度のジョン・ネルソンR I会長(カナダ)は「ロータリーは愛国心に代わるものではなく、むしろ愛国心を鼓舞するものである」と述べています。

百年の歴史で最も大きい変革は、長年固執して来た男性天国を女性に開放した事件でした。それも人権や道義上から自発的にではなく、司法の敗北判決に単純に従ったものでした。昔女性入会が認められれば退会すると強言する変な会員が沢山いましたが、1人も辞めていません。即その激震を見事に吸収して、いつの間にか「塞翁が馬」に変換させて了ったのです。この柔軟性と臨機応変がロータリーの宝物のような気がします。ポールの云う「ロータリーには変えてはならない規則は何もない」からきたものでしょうか。今や女性会員は世界中で会員減少というロータリーの危機を救い、奉仕の理想にも大きく貢献しています。

以上のように困難な壁に突き当たった際、これを解決し乗り越える方策と知恵と努力を続けながら、発展して参りました。そしてR Iが世界平和を正面に打ち出して以来、国際奉仕はロータリー国のロータリアン同志の交流と云う枠を越えて、非ロータリー国の恵まれない方にも手を差し延べることになりました。マンパワーとマネーパワーが限りなく必要になり、会員増強、資金増収を諮る意図もあって、地区やガバナーの負担を軽くすることを考えて、DLPが提唱されました。このDLPを採用しなければ地区に対する補助金を出さないと発表されて一気に世界中が採用しました。例えばガバナー補佐を重視して人材を育成するという大きい長所がある反面、公式訪問の簡略化でガバナーと一般会員との接触が失われ、お互いの意志理解が希薄になりました。長短様々ですが、地区の自主性によって内容も様々なのです。その制度を、クラブレベルの自主性にもと提案されたのがCLPなのです。

地区やクラブや個人の負担を減らして、然も人頭分担金の合計は増収になるという解決策です。こゝで知っておかねばならないのは、そのDLPもCLPも規定審議会による制定案

決議ではないことです。憲法改正ではないのです。これを採用すれば「便利です」という推奨事項なのです。例えばシンガポールの国際大会でR Iは女性会員の入会を認めるが、具体的な方策は各クラブの判断に委せると決ったのと、凡そ同様に弾力性のある方法論と考えられます。CLPにどのように対処するかは、クラブの自主性なのです。必要な1部分を採用することも可能です。余り神経質にせっかちに考えずに余裕を以て行動しようではありませんか。

即、賛成か反対か等と単純に色分けする制度ではありません。それに関連してこのCLPを会員の質量論に拡大解釈する方がいますが、これは全く無意味な主張で古来質か量かの問題は不毛の論争なのです。

私が2回目の規定審議会に出席した際のことです。「超我の奉仕」に次ぐ第2テーマの件で日本議員の多くが重要性を主張し、これに対し不要論も外国から出ました。その際元R I会長が「必要か不要かの議論は止めましょう。この文言は日本の方にとって大切な条項なのです。ならば無理に廃止しなくても、それはそれで良いではありませんか。」と発言して日本の為に残せと提案されたのです。若しこれが予算を伴う条項であれば如何と考えさせられました。日本の常識は世界の非常識という言葉があります。CLPに関しても何故日本人はそんなに一律に突っ走るのですかと疑問を抱く外国人は数多いと聞きます。決議23-34も同じ様な経過で、日本の元理事にもこれが癌と仰る方もいて視野視点の問題でしょう。何事も結論の前に深く学ぶことが肝要です。

今ロータリーは変り目です。この壁を上手に越えて発展を続けなければなりません。その為に世界中から集った俊秀の理事や本部の専門家が検討に検討を重ねた結論が、DLPとCLPです。その労を是とし勉強を重ね実態を把握しましょう。それから四つのテストです。先づ考えて(THINK)次に言動(SAYorDO)です。